

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第434号 平成24年11月13日

新聞広告クリエイティブコンテスト

日本新聞協会広告委員会は、毎年度、「新聞広告クリエイティブコンテスト」を実施しています。

主催者によると、このコンテストは「若いクリエイターの皆さんに、新聞広告の可能性を広げるような独創的で斬新な作品を作っていただくため」に実施しているもので、今年度は「日本」をテーマに作品募集が行われました。その結果、1150点の応募作品の中から以下の作品が選ばれ、11月5日の新聞紙上にも発表されています。

ご覧になった方もいらっしゃると思いますが、それらの作品を簡単に紹介しましょう。

最優秀賞は「日本はつづく」という題で、国旗がはためく下に「つづく」という文字が表記されています。



【写真は、新聞広告データアーカイブから転用】

今、日本は多くの困難に直面していますが、風に力強くはためいている国旗の様に、日本の底力を感じさせてくれる作品だと感じます。

審査委員は「つづくは希望の言葉でもあり、『日本は続く。それであなたは、どうするの?』と見た人の心につぶてを投げている」とも読み取れると述べています（新聞広告データアーカイブから）。

これからも続いていく日本という国に私達日本人がどう能動的に係わっていくか、その事が問われている事は間違いありません。

優秀賞は「おちつけ日本」という題で、紙幣に描かれている聖徳太子が「おちつけ日本」といっている図柄です。



【写真は、新聞広告データアーカイブから転用】

今の日本は政治も経済もバタバタしていて腰が据わっていない、そんな風を感じているのは多分私だけではないでしょう。「おちつけ日本」という呼びかけは、将来の日本に対する不安の裏返しかも知れません。

この作品では、聖徳太子に「おちつけ日本」といわせているところがなかなか考えているなど感じさせます。

聖徳太子といえば、推古天皇の摂政として活躍していた607年、強大な国家隋に使節団（遣隋使）を派遣する際、団長の小野妹子に隋の皇帝煬帝に宛てた天皇の親書（国書）を持たせます。

その中身こそ「日出処天子 至書日没処天子 無恙云々（日いずるところの天子、日没するところの天子に書を致す。つつがなきや）」

というものです。この書を受け取った煬帝は激怒しますが、日本に対して報復的な事はしていません。というより、出来なかったというべきでしょう。

当時、巨大な中国と周辺の小国は冊封関係によって維持されており、当時の日本も例外ではありませんでした。にもかかわらず、聖徳太子は、厳しい国際情勢をしっかりと分析し、隋が高句麗と緊張関係にある今がチャンスと、煬帝に対し、「日本の天皇は貴方と対等ですよ」と事実上の独立宣言をしたのです。以降日本は、中国との間で、冊封関係に戻る事はありませんでした。日本の歴史を振り返れば、極めて重要な瞬間だったというべきでしょう。

日本は、政治・経済、更には国際関係においても厳しい状況にありますが、「こういう時こそ、落ち着いて、将来を見据えた議論をすべきだ」という聖徳太子の声が聞こえて来そうです。

この他、コピー賞として「楽しみがある国」、デザイン賞として「ひとつつつ」、学生賞として「蓋を開ける勇氣。蓋をしない努力。」という作品がそれぞれ選ばれています。

紙面の都合上、それらの作品は取り上げませんが、いずれも今という時代を投影している素晴らしい作品だと感じています。特に、学生賞の「蓋を開ける勇氣。蓋をしない努力。」というキャッチコピーは秀逸だと思います。

この作品の制作者である近藤千鶴さん（専門学校桑沢デザイン研究所）は、「蓋をあけること、蓋をしないことで日々新しいものに生まれ変わって成長していけたらと思っています」とのべています（新聞広告データアーカイブから）。

私は、その作品を見た時、「蓋を開ける時は、その事による影響などを見極め、慎重に、しかし勇気を持って開けるべきであり、一旦蓋を開けた以上は、その責任を全うする胆力、エネルギーを持つべきだ」というように理解しました。

多分に、今の政治状況などを思い浮かべたせいかもしれませんが、近藤千鶴さんのコメントを見ていて、思いのベクトルの違いを感じて、やっぱり若いって良いなあと思ってしまいます。（塾頭：吉田 洋一）